



## 就任のご挨拶

感覚器病学講座・耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野 教授 福田 諭



この度7月1日付けをもちまして犬山征夫教授の後任と致しまして伝統ある北海道大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野を担当させて頂くことになりました。大変光栄な事と思っております。と共にその責任の重さ、大きさを痛感致しております。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野は脳神経12対のうち視神経を除く11対の神経に特に関係が深く、聴覚、平衡覚、嗅覚、味覚、発音、構音、発声、呼吸、嚥下、咀嚼など複雑かつ人間の基本生活にとって非常に重要な機能が集まっている部位を担当する分野であります。

省みますと私ども耳鼻咽喉科学教室は大正11年初代・香宗我部 寿教授によって開設され、その後2代目・猿渡二郎教授、3代目・平野新治教授、4代目・寺山吉彦教授、そして5代目犬山征夫教授と連綿として続く輝かしい伝統がございます。私自身、昭和51年北大を卒業して耳鼻咽喉科に入局後、25年間の間、丁度半分ずつ寺山教授のもとで約12年、犬山教授のもとで約12年勉強させて頂きました。両先生の教室運営・考え方は素晴らしいものであり、私はこれらの長所を取り入れ、その中に自分のカラーを打ち出せるように努力していきたいと思っております。

寺山教授は耳科学を主体として、幅広い臨床、研究を開拓されました。その中で私は主として内耳ウイルス感染の研究を行い、倉田 毅東大医科病理助教授（現国立感染症研究所副所長）には硬組織（内耳蝸牛）の免疫組織学的手法について大変お世話になりました。この時は倉田先生の優しさを隠し持つ厳しさとでもいったものを感じ取り、大変勉強になりました。このテーマで学位取得後、1985年から1987年までカリフォルニア大学サンディエゴ校 Harris 教授の元に留学し、内耳ウイルス感染について更に研究を進め、またアメリカ的なものの考え方・見方・厳しさや、学会ポスターでの口角泡を飛ばしながら決着の付くまで行う討論風景などを見、有意義な2年間を過ごさせて頂きました。一方、犬山教授は頭頸部悪性腫瘍、頭頸部外科学を主体として、幅広い臨床、研究を開拓され、その中で私は頭頸部悪性腫瘍の集学的

治療を広く勉強させて頂きました。

紙面の関係で詳細は避けますが、内耳ウイルス感染、突発難聴におけるムンプス不顕性感染とムンプス予防接種の問題、ナビゲーション手術、両側聴に対する人工内耳・脳幹インプラント、再生医療（感音難聴、喉頭、嗅神経、気管）、頭頸部癌に対する個別化した集学的治療、臓器機能温存、癌の化学予防、急増する鼻アレルギー、めまいへの対策等々、幅広いこの領域で臨床・研究を更に押し進めて行きたいと思っております。これには自分自身がさらに研鑽を積むとともに、若い人を育て同門会と教室の関係をさらに密にし、幅の広い教室づくりができればという風に願っております。一方で、医療・大学を取り巻く環境は非常に厳しくなってきておりますが、基本は基本で変わらないとも思っております。特に臨床におきましては「人間性豊かな医療人の育成」が非常に大事であると考えております。なぜならば、これからいやや無機的とも言い換えられる情報化時代の中で医師としてより一層求められるのは、また患者・家族の信頼を得ることができるのは医師の人間性・責任感ではなかろうかと思うからであります。

また最近の医療のキーワードの一つにチーム、組織、チーム医療、チーム手術などがあげられ、これには他と連携する能力が重要であるとも思っております。医局、病棟、外来、手術部、看護部、検査部、事務部、他科、基礎系各科、他学部、他大学、時には国境を越えて他大学と連携する能力が臨床でも研究でも非常に大事であると考えております。関連病院との関係もこれに入りましょうし、開業医、勤務医の先生とのしっかりととした文書のやりとり、紹介医の立場を考えることも重要であると考えております。私自身、完全無欠な人間ではありません。長所もいくつかあります、欠点だってあると思います。しかし私自身が育ってきたこの教室をより良くしたい、そしてこれまでお世話になった医学部、医学研究科、そして北海道大学、また札幌市、北海道の耳鼻咽喉科を更に良くするために微力ではありますが貢献、努力したいと強く思っております。ひいてはこの北大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野から日本、世界に良い臨床、研究を発信できるような気概を持って臨みたいと考えております。これには大学、病院、教室、関連病院、同門会等がチーム、組織として一丸となって仲良くやっていくような体制を築くことが重要であると思います。こう

した組織、チーム医療のバランスの破綻は医療、医者の“めまい”であると考えます。こうした“めまい”を起こさないよう、また医療・医学の正しい方向性を見失うことのないよう、是非柔軟でバランスのとれた舵取りを行っていきたいと強く思っている次第です。

香宗我部先生からの教室の流れを駅伝に喩えると、現

在第五走者犬山先生から第六走者として、たすきを引き継ぎ、ちらっと腕時計に眼をやったところでございます。アンカーはいませんが、第七走者にキッチリとバトンをわたすべく精進致したいと思っております。

皆様のご指導、ご支援、ご鞭撻のほどをお願い申し上げる次第でございます。

## 教授就任のご挨拶

癌制御医学講座・腫瘍内科学分野 教授 秋田 弘俊



この度、平成13年8月1日付けをもちまして、腫瘍内科学分野の教授を拝命致しました。これはひとえに皆様のご厚情とご支援の賜物と深く感謝し厚く御礼を申し上げます。

私はこれまで、多くの先生方から貴重な教えをいただいて参りました。北大医学部の学生時代には、同期の仲間数人とともに、医学部附属癌研究施設病理部門に入りさせていただきました。細川眞澄男先生や亡くなられた武市先生にご指導いただきました。研究に対する諸先輩の真剣な姿勢に感銘を受けますとともに、腫瘍学に対する興味を初めて抱いたのもこの時でございます。

昭和56年3月に北海道大学医学部を卒業いたしまして、内科学第一講座に入局させていただきました。教育病院での研修を終えた後、川上義和教授のご啓示をいただき、本学理学部附属動物染色体研究施設で研究に携わりました。その後、癌研究施設分子遺伝部門で葛巻謹教授のご指導を受けました。続いて昭和62年から2年6ヶ月の期間は、米国国立癌研究所 NCI-Navy Medical Oncology 部門に留学し、固形腫瘍でしばしば遺伝子増幅や過剰発現を示す myc 族遺伝子の構造と機能に関する研究に従事いたしました。この部門は診療面においては、ベセスダ海軍病院（レーガンやブッシュなど歴代米国大統領の医療機関として知られています）の腫瘍内科を担当しておりましたので、この留学は、臨床教室における基礎医学研究のあり方を学ぶ機会であったばかりではなく、米国の医療における腫瘍内科の位置付けと役割を直接見聞する貴重な経験でもございました。

帰国後は、北大第一内科に戻り、肺癌を中心に固形腫瘍の診断と治療に携わりましたが、この間一貫して、治療成績の向上をめざして、癌の分子生物学的知見を肺癌の診断や治療、層別化に応用する研究に取り組んで参りました。平行して、肺癌治療の臨床試験や肺癌ハイリスクグループとしての職業性肺疾患に関する研究にも携わって参りました。川上教授のご退官後は後任の西村正治教授にご指導とご支援をいただいて現在に至りました。

本分野は、北海道大学の大学院大学化に伴って新設さ

れた教室であると同時に、国立大学初の腫瘍内科学の教室でありまして、その責務の大きさと重さに身の引き締まる思いでございます。一方、全く新しい教室でありますので、私なりの自由な発想で診療、研究、教育に取り組める教室を主宰する天恵をいただいたことに心から感謝しております。教室の立ち上げに際しましては、出身教室の呼吸器病態内科学分野（第一内科）のお力添えをいただくことになりますが、教室運営の柱として、診療の充実、将来を担う腫瘍内科医の育成、難治癌対策を中心とする腫瘍学の発展への貢献を掲げて、全力で教室創りに邁進する所存でございます。

特に診療では、「癌治療における集学的治療システム」を構築したいと考えております。これは、ひとつの医療チームのなかで各専門医が相互に緊密な連携を取りながら各自の役割を果たす合理的な診療スタイルであります。これまで本学附属病院の肺癌診療で創り上げてきたシステムをより一層充実させますとともに、種々の臓器の癌についても、各科の先生方とご協力して、集学的治療システムを創って参りたいと存じます。そして、この医療チーム内での切磋琢磨によって、幅広い知識を持ちリーダーシップを發揮する腫瘍内科医を育成することができましたら、望外の喜びと存じます。

研究では、固体腫瘍の原因や病態に関わる主要な遺伝子・分子が明らかになり臨床医学に還元できる時代を迎えておりますので、これらに関する情報を癌の診療に応用する研究を推進して参ります。特に、新しい治療法（遺伝子・分子を標的とした治療、免疫治療など）を開発するための Translational Research とそれらを実地臨床に導入するための臨床試験は、癌治療成績の向上のためには必須でありますので、何よりも力を注ごうと意欲に燃えております。これらの研究を通して、基礎医学教室との連携や大学院生の教育指導にも努めます。

今後も精進を重ねて、一歩一歩新しい教室を立ち上げて参る所存でございますが、そのためには、出身教室の呼吸器病態内科学分野（第一内科）はもとより、各内科学分野、同一大講座に属する腫瘍外科学分野および遺伝子制御医学分野、さらには臨床医学および基礎医学で腫瘍や癌患者に関わる各教室・診療科の絶大なるご支援ならびにご助言を是非ともお願い申し上げまして、就任のご挨拶とさせていただきます。

## 医学研究科附属動物実験施設長就任のご挨拶

病態解析学講座・分子病理学分野 教授 吉木敬

平成13年8月1日付で医学研究科附属動物実験施設長を拝命した。平成15年7月31日まで2年間の任期である。

ヒト遺伝子の塩基配列がほぼ明らかとなり、現在その正常機能や機能異常の解析、遺伝子間の相互作用、発現蛋白の構造解析や機能の解析、さらにその機能異常による異常蛋白と疾患の関わりなどの解析が進められている。この様な遺伝子解析・研究を推進する為には動物実験は必須である。医学研究科の多くの分野でも大、中、小動物を使った動物実験が数多く行なわれており、原因不明のヒト疾患の病因解明や新しい治療法の開発の為の研究が昼夜をとわず、進められている。

現在申請中の医・歯学総合研究棟の建築が平成14年度に始まる、次の医学研究科の再開発では老朽化と狭隘化の著しい動物実験施設の改修も予定されており、平

成16年度には建築が始まることも予想される。2,3年後に迫った国立大学法人化では(1)世界水準の教育研究を開拓する個性豊かな大学、(2)社会へのアカウンタビリティ、(3)競争原理の導入、(4)大学運営における経営責任の明確化などが基本的な方向として議論されている。その意味でも、北大における医学、生命科学の研究教育の発展、充実に果たす動物実験施設の役割は極めて大きいものがあると云える。

全学共用施設への転換も視野に入れつつ、北大の将来を見据え、社会へのアカウンタビリティにも充分応えられる近代的で、機能性に富んだ動物実験施設の再開発が当面の最大の課題である。専任の有川教授や動物実験施設のスタッフと共に努力したい。

皆様のご理解とご協力を心からお願いする。

## 医学部学生教育ワークショップ報告

神経機能学講座・分子解剖学分野 講師 高山千利

教育基本法の前文に「この（憲法の）理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。」と書かれております。医学を含めた生命科学の分野においても、状況は同じであり、その根本は、医学教育が支えるものであると考えます。さらに、言うまでも無いことですが、医学は実学であり、医学部の一義的な目的は医師を育てることにあります。したがって、医学教育は、大学における専門教育であるとはいって、義務教育と似た側面を持ち合わせていると言えましょう。ところが、大学教育に共通して言えることですが、「教育を担う教官が、教育方法などを系統的に教育される機会に恵まれていない場合が多い。」という問題があり、多くの先生方が、各々の分野に於いては最先端の仕事をしていても、教育に関しては素人であるということが、医学教育の実施にあたって大きな課題になっています。

近年、生命科学の情報量が著しく増大し、学生に与えるべき講義項目もそれに見合って増え、現状に見合うカリキュラムの迅速な改革が必要になりました。また、現代社会の複雑化によって価値観は多様化し、医学生の目的意識も一様ではなくなり、医学教育を行っているスタッフが学生だった頃とは大きな違いがあります。学生の学ぶ態度は大きく変わり、学生が教官に求める講義の姿と、教官が行う授業の内容の間に開きが生じていることも事実です。さらに、様々な医療過誤や薬害エイズ・薬害ヤコブ病そしてハンセン病に対する行政措置の遅れは国民の知るところとなり、医療関係のテレビ番組・新聞記事の増加によって、最新医療に関する情報も一般的な知識

となりました。したがって、一般社会が医師に求めるものは大きくなり、マスメディアの目は今後とも益々厳しくなるでしょう。一方で、クローン人間、遺伝子導入による胚操作など実現可能な技術と、一般社会の考え方との間のギャップを正しく感じることのできる社会倫理性の取得も求められます。こうして、思いつくままに事例を挙げただけでも、沢山の課題・問題が目の前に突きつけられ、教官と学生が医学教育の場を通じてクリアしなければならないハードルはとても高く数多いと言えましょう。指數関数的に増大する医学に関する情報を効率的に学生に伝え、さらに、これまで同様の基礎的な知識と技術の習得を行い、社会のニーズに応え、高レベルの医学者を輩出するためには、教育の充実は不可欠であり、教官それぞれが自分たちの問題として、深く肝に銘ずるべき重要課題と言えましょう。

これらの、困難な課題を解決するにあたって、医学教育ワークショップ（以下 WS）は大変有用であり、非常に貴重な時間であります。(1) 少人数で活発に討論し、結論を導き出すことができる。(2) 研究や教育分野の枠を超えて情報を交換することができる。(3) 新しい教育法を知ることができる。(4) 医学教育において、教官の間で共通理解を持つことが出来る。などのメリットを持ち、問題点が明らかになり、客観的な結論を導く事が可能になります。

今年の WS は 8 月 18、19 日の 1 泊 2 日、JR 夕張駅近くのファミリーハウス「ふれあい」にて行われました。昨年までは、教官と事務官のみの参加でしたが、今回か

ら5年と6年の学生がおのの1名ずつ加わり、様々な立場からの活発な討論が行われました。テーマは、「コアカリキュラムの導入について」「統一試験と学士入学制度導入に伴う新しいカリキュラム案の作成」「(学生の達成度などを示す)教育評価の方法と教育目標の整理について」そして、「重点化された大学院における大学院カリキュラムのありかたを考える」の近々医学部・医学研究科がクリアしなければならない課題4点でした。小グループに分かれて話し合いを行い、得られた案について発表、そして質疑応答が行われました。詳細については、後日発行される冊子を参照ください。今回のWSに参加し、分野が違って、異なった見方をしている先生

方が、それぞれの思いつくところの意見を出し合って、額を付け合わせて話し合うことによって、有意義な結論(案)を導き出す事が可能であることが実感できました。さらに、全体討論によって、問題点も明らかになり、客観的で実現可能な方法が生まれます。

繰り返しになりますが、医学教育の重要性が増し、教官側に柔軟な頭の切り替えと対応が求められており、真剣に考える時が来ています。今後、各自が問題意識を持ち、Top Down式の教育改革ではなく、みんなが同じレベルで意見を持ち合って、ある時は学生の目線から、WSなどを通して語り合えば、困難な課題を1つずつ克服できると感じました。

## 国立大学教官研究成果活用企業、ジーンテクノサイエンスの紹介

遺伝子病制御研究所・分子免疫分野 教授 上出利光

ジーンテクノサイエンスを平成13年3月1日に設立してから、約半年が経過しました。概要は、北海道大学ホームページの産学連携でも紹介されています。幸いにも大学院医学研究科／医学部の皆様にあらためて紹介させていただく機会を得ましたので、簡単に現職の国立大学教官がその研究成果を活用し、新規に起業したジーンテクノサイエンスとは「なんぞや?」に関してご説明いたします。

本社：  
札幌市北区北15条西7丁目21番地733 NRKビル4階

役員構成：

代表取締役社長	清藤 勉
代表取締役副社長	永井 卵一郎
取締役（研究開発担当）	上出 利光 (北海道大学遺伝子病制御研究所教授)
取締役	阿部 修
取締役（研究開発担当）	藤堂 省 (北海道大学大学院医学研究科教授)
取締役（研究開発担当）	小野江 和則 (北海道大学遺伝子病制御研究所教授)
監査役	松本 康一郎 (小樽商科大学／大学院教授)

設立主旨：

政府はかねてより大学が保有する技術や研究成果の社会への還元方法につき種々検討を加えてきましたが、平成12年に「産業技術強化法」や「国家公務員法第103条第3項に基づく人事院規則14-18および14-19」を施行し、現職国立大学教官が、その研究成果を活用する企業の役員等を兼ねることを可能にする法的整備を行いました。

我々もこの法的整備を受けて、新会社「ジーンテクノサイエンス」を設立する決意に至りました。ジーンテクノサイエンスは、小樽商科大学ビジネス創造センターの指導のもと、北海道大学遺伝子病制御研究所と大学院医

学研究科の3名の教官の研究成果の事業化を目指しております。北海道大学事務局、遺伝子病制御研究所、医学部、および小樽商科大学ビジネス創造センターの事務部門等関係部署の御支援をいただき、平成13年2月2日人事院より許可を受ける運びと成りました。

大学教官が準備段階から積極的に参画して設立するジーンテクノサイエンスが目指すものは、以下の3点です。

- (1) 大学で生まれた新技術を基盤とするベンチャー企業の設立により、雇用の創出を図り、北海道地域や我国経済を活性化する。
- (2) 企業活動からの収益の一定部分を、事業に参画した教官、職員、学生に還元し、大学における研究、教育、勉学環境の改善に資する。
- (3) 更には、種々の研究機関に積極的に利益を還元し、知的資産創造や研究教育環境整備を支援する。

平たく申しますと、大学は情報、人材の貯水池であるべきです。しかし教官の定員は固定されており、如何に優秀な若手が出現しても定員に空きがなければ、人材を大学に確保することはできません。医学部は多少事情が異なるかもしれません、我々の基礎研究部門では、若手研究者の指導は、大学院に在学する4年間が基本となります。学術振興会等の博士後研究員の制度もありますが、競争が激しく、予め採用を予定するわけにもいきません。我々のベンチャーは既に7人の新規雇用をいたしました。このベンチャーで若手研究員を雇用し、研究の機会を与える事ができれば、例えば、大学院4年、ベンチャー3年、留学2年、帰国後更にベンチャーで2-3年と、10年間の計画を練って若手を指導する事が可能となり、またその若手が有する情報、技術を従来に比べて格段に長期間、大学／およびそれと連係する企業に確保することが可能になるわけです。

このような考えに賛同する教官等（北海道大学、札幌医科大学、小樽商科大学、東京女子医科大学、国立予防衛生研究所（現国立感染症研究所））や企業家個人の出資により設立されましたが、特徴は、現職大学教官の持

ち株を合わせると、筆頭株主であるということです。

事業：

〈モデル作製部門〉

1. 遺伝子改変動物および疾患モデル動物の受託作製

〈遺伝子研究部門〉

1. 疾患関連遺伝子の探索

- 1) differential display による新規遺伝子の探索
- 2) SNP 解析による疾患感受性および薬剤感受性の検討

2. 遺伝子機能の検討

- 1) 各種組織／細胞における遺伝子発現の解析 (in situ hybridization 等)

- 2) 病理組織を用いた予後および治療効果判定

〈蛋白機能研究部門〉

1. 組み換え蛋白の作製

2. 機能不明蛋白に対する抗体作製

3. 機能不明蛋白のリガンド検索

〈コンサルテーション部門〉

1. 遺伝子情報に基づく新薬開発研究のコンサルテーション
2. 新規薬剤の作用機序、薬効試験のサポート
3. 遺伝子改変動物および疾患モデル動物を用いたオーダーメイド薬剤の研究開発のサポート

何せ生まれ立ての会社ですので、理念が先行して、具体策はよちよち歩きでついていくといった状況です。それでも、大学との共同研究締結、大手製薬会社との特許共同出願、製薬会社との国際的ハーモナイゼーションを前提とした臨床治験実施のための医療機関のインフラ整備に関するコンサルテーション契約の締結、遺伝子情報の利用に関する啓蒙活動への積極的取り組み（北海道新聞の10月1日朝刊をご参照下さい）等、ローギヤ？でスタートしております。開発研究の倫理性遵守を厳しく受け止め、日々、倫理委員会も立ち上げができると思います。現職の大学教官が関与する企業であることをふまえ、その活動状況は会社のホームページで情報公開をいたしております (<http://www.g-gts.com>)。皆様のご理解とご支援をお願いいたします。北海道大学内で、多くの共同研究ができればこれにまさる事はありません。

## 平成13年度医局対抗野球大会

医学部3年 村川力彦

毎年恒例の医局対抗野球は今年も暖かくなってきた6月開幕、例年通り、雁来球場、武田薬品球場を主な会場として行われました。

今回も、1,2回戦は大差、コールドゲームとなる傍ら、女性の参加もあるなど、ほのぼのとした雰囲気もみられました。準決勝には予想されたように、整形外科、第1内科、第2外科、泌尿器科が進出してきました。夏休みをはさんで、準決勝は9月1日、2日の両日行われました。

対戦は第1内科対泌尿器科、整形外科対第2外科となりました。好ゲームが予想されましたが、意外なことに両試合ともに10対0のコールドゲームとなり、第1内科と第2外科の間で優勝を争うことになりました。決勝戦はその1週間後、曇り空のもと、武田薬品球場で行われました。第1内科は人数で圧倒、それに対して、第2外科は野球経験者を揃え、対決しました。試合は、第2外科が先制し、第1内科が本塁打などで逆転、さらに第2外科が本塁打などで再逆転するこれまでにない好ゲームが展開されました。結果は8対5で第2外科が2年ぶりの優勝を飾り、大会は閉幕しました。

お忙しい診療の合間を縫って、ご参加いただいた先生方、ご苦労さまでした。また、大会の運営にご協力いただいた各医局の先生、審判をしてもらった準硬式野球部を中心とした学生のみなさんには厚く御礼申し上げます。

来年もこの大会に多くの方が参加され、盛り上がっていくことを期待しております。



優勝した第2外科



## 平成 13 年度東日本医科学生体育大会

医学部 3 年 中 田 玲 子

今年も 7 月下旬から 8 月中旬にかけて、東日本医科学生体育大会（東医体）夏季大会が開催されました。

今年の主管は防衛医科大学校、杏林大学医学部、新潟大学医学部、日本医科大学医学部で、参加校は 36 校、約 13,500 人と去年を越す人数です。今回行われた夏季大会には、全 23 種目のうちアイスホッケー、スキーを除いた 21 種目の試合が関東周辺や新潟などにおいて行われました。各部活によって東医体の位置付けは様々ですが、この大会の優勝を最終目標に掲げている部活は非常に多いようです。前東医体評議委員である 6 年の小西竜太さんが、去年の広報で、私たちにとっての東医体を「4 年ごとに来るオリンピックのようなイメージ」と表現していましたが、まさしくそのとおり、東医体はそれぞれの選手、部活にとって色々な意味で思い入れの強い大会であるといえます。

今年度東医体夏季大会に、北海道大学からは、陸上、準硬式野球、テニス（男、女）、ソフトテニス（男、女）、卓球（男）、バレー、ボーラー（男、女）、バスケットボール（男）、バドミントン（男、女）、サッカー、柔道、剣道、水泳（男）、ボート、ハンドボール、ゴルフ（男）、の 15

種目 24 団体が参加しました。

メダルを獲得した団体は以下のとおりです。

ソフトテニス（女） 2 位  
バスケットボール（男） 2 位

準硬式野球は、3 位決定戦で惜しくも敗退、4 位の成績を収めました。

冬には、東医体冬季大会が開催され、12 月末にアイスホッケー、2002 年の 3 月中旬にスキーの試合が行われることになっています。それぞれ、目標に向かって頑張って欲しいと思います。

今年に入り、これまで長く東医体評議委員をつとめてきた小西さんからこの仕事を引き継がせていただくことになりました。これまで東医体には選手として参加するだけだったのですが、評議委員になって新たに運営面で北海道大学の代表として関わることとなり、北大の OB、OG の方々や教務掛の皆さん、各講座の先生方による多大な協力の存在にあらためて気づかされました。この場をお借りして、心からの感謝の気持ちを申し上げるとともに、今後ともご支援をお願い申し上げます。



ソ フ ト テ ニ ス 部



ソ フ ト テ ニ ス 部



準 硬 式 野 球 部



## お知らせ

### ✿ 医学研究科・歯学研究科合同慰靈式 ✿

医学研究科・歯学研究科では、9月27日(木)午後1時30分から医学部基礎大講堂において、この1年間医学・歯学研究のため尊いご遺体を捧げられた175名の御靈のご冥福をお祈りする慰靈式が執り行われました。

慰靈式には、遺族、来賓、副学長、関係部局長、教職

員、学生等約350名が参列しました。参列者全員による黙祷が行われ、医学研究科長・歯学研究科長から追悼の辞が述べられた後、参列者による献花を行い、厳粛のうちに慰靈式が終了いたしました。

### ✿ 医学系大学倫理委員会連絡会議 ✿

7月13、14日の両日、第25回医学系大学倫理委員会連絡会議がホテルライフォート札幌で開かれました。今回は本研究科が当番校となり、西研究科長が会長、前研究科長の井上教授が実行委員長を務め、各大学などから約140人が参加しました。

第1日目は「21世紀の医療と倫理」がメインテーマ。京都大学名誉教授星野一正氏の基調講演、厚生労働省課長補佐の遺伝子解析ガイドラインに関する説明等の後、

遺伝子治療の現状と問題点等について、活発な討論が行われました。

2日目はパネルディスカッションとして「医療と情報公開」が取り上げられました。医療事故と情報公開の事例に加え、医療事故に係る情報の取り扱いに関する現状と課題、またカルテ開示の問題等について、抱える問題の討議が行われました。

### ✿ 北大オープンユニバーシティ・体験入学について ✿

今年度から、オープンユニバーシティに加え、新たに体験入学が実施されました。

オープンユニバーシティは8月6日(月)の午前と午後の2回に分けて、学部からの肉声による情報提供及び学部のアピールの場とする目的に企画されたもので、医学部では各分野等の協力を得て、附属病院及び研究室の見学を取り入れた内容で実施されました。参加者は午前の部75名(うち道外28名)、午後の部38名(うち道外11名)の合わせて113名の受験志望者に父母等約20名の方々を加え、見学に訪れました。

参加後、「様々な顕微鏡を見て頂き、ますます医学に興味を惹かれました。来年北大の医学部を受験して合格できるようにがんばりたい。」などの感想が寄せられ

ました。

また、本年度から新たに実施された体験入学は、8月7日(火)の1日間を、本学の教育・研究に直接触れることによって志望の動機付けや目的を明確化することに役立ててもらう目的で企画されたもので、午前に講義、午後に顕微鏡観察実習を取り入れた内容で実施されました。

参加者は63名(うち道外13名)の受験志望者で、講義や実習に真剣に取り組み、講師への質問等も積極的に行っていました。

この他にも、受験志望者等への広報活動として、旭川、函館、帯広などで入試説明会等が実施されています。

### ✿ 早期臨床演習(ECE)について ✿

学部1年次の学生を対象に、医学学習のモチベーションを高めるために、早期臨床演習(Early Clinical Exposure: ECE)が9月に行われました。

今年度、福祉施設見学については道立福祉村をはじめとする8施設で、さらに、病院での演習は道内各地の

46病院で実施されました。

施設見学は、一部の施設を除き9月21日(金)に、病院での演習は、9月25日(火)~28日(金)に実施されました。

## ✿ 医師国家試験の案内について ✿

第 96 回医師国家試験の施行が官報に掲載され、試験日程等は、次のとおりとなりました。

- ・出願期間：平成14年1月17日(水)～2月1日(金)
- ・試験日：平成14年3月16日(土)～3月18日(月)
- ・合格発表：平成14年4月25日(木) 午後

なお、在学生の受験願書等は、12月上旬に厚生労働省から大学へ一括して送付されます。

また、第 95 回の試験から試験内容が変更になっております。冊子「平成 13 年度医師国家試験出題基準」が若干部、教務掛にありますのでご利用下さい。

## ✿ 平成 14 年度大学院医学研究科（博士課程）学生募集案内 ✿

平成 14 年度大学院医学研究科博士課程の入学試験日程は、前期試験および後期試験の 2 回に分けて実施されています。

前期試験は、9月5日（水）に実施されました。19名が受験し、全員が合格しました。

また、後期試験日程は、右のとおりです。

- ・出願期間：平成14年1月7日(月)～1月15日(火)まで
- ・試験日：平成14年2月6日(水)  
なお、外国人留学生の場合は、翌日2月7日(木)にも、日本語の試験が実施されます。
- ・合格発表：平成14年3月1日(金)の予定

### 編集後記

今年は冷夏と言って良く、気付かぬ間に駆け足で秋がやってきた感じがある。

世の中の景気も冷え込み、加えてアメリカでのテロの発生により一段と暗い気持ちにさせられている。一方、医学部においても大学院の教育の充実、独行法に向けての対応など難問が山積みしている。しかしながら、このような時にこそ皆が力を合わせて上昇思考で立ち向かっていかなければならないと考える。

本号において、ジーンテクノサイエンスについての紹介が記載されているが、これも新たな時代に向けての我々がなし得る行動の一つとして勇気付けられるものであろう。また、この他、感覚器病学講座の新教授に就任された福田 諭先生とやはり新設科である腫瘍内科の教授になられた秋田 弘俊先生、および動物実験施設長に就任された吉木 敬教授から就任にあたっての読者へのメッセージを頂いた。今後、お三人の活躍が期待される。

さらに、イベントの報告あるいは読者の皆様に大いに関係のある行事予定の御案内もできる限り載せたつもりであるが、今後、もし掲載希望のある行事があれば、編集局にどしどし連絡して頂ければ幸いである。

(岩崎 喜信)

### — Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

[ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp](mailto:ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp)

となっています。どうぞご利用ください。

### 北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行 北海道大学医学研究科広報編集委員会  
060-8638 札幌市北区北15条西7丁目  
連絡先 医学部庶務掛 電話 011-706-5003  
編集委員 有川 二郎、岩崎 喜信、田中 淳司  
富樫 廣子、佐藤 松治